

科学技術政策担当大臣等政務三役と
総合科学技術・イノベーション会議有識者議員との会合
議事概要

- 日 時 平成27年4月2日（木）10：35～11：02
- 場 所 中央合同庁舎8号館 6階623会議室
- 出席者 山口大臣、松本政務官、原山議員、久間議員、内山田議員、小谷議員
中西議員、橋本議員、大西議員
阪本内閣府審議官、森本統括官、中西審議官、中川審議官、松本審議官
経済産業省 片瀬局長、星野審議官

○議事概要

○原山議員 改めましておはようございます。

科学技術政策担当大臣等政務三役と総合科学技術・イノベーション会議有識者議員との会合を開催いたします。

本日は平野さんがご欠席ということで、平副大臣も急遽国会対策ということでご欠席でございます。

本日は、議題1件でございます。経産省におきます第5期基本計画の論点ということですが、公開ということでよろしいでしょうか。

プレス、どうぞ。

（プレス入室）

課題1. 経済産業省 産業構造審議会産業技術環境分科会研究開発・評価小委員会の第5期科学技術基本計画の論点

○原山議員 では早速入らせていただきます。

現在第5期基本計画策定に向けてさまざまなステークホルダーの方々からご意見いただいていると同時に世界的な動向もウォッチしているところでございます。そこで、本日は経済産業省から産業構造審議会産業技術環境分科会におきましてご検討いただいております第5期基本計画に向けた検討をきょうはご説明いただくということで、片瀬さんにいらっしやっていただきました。

早速ですが、プレゼンをしていただいた上で議論に入らせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

<経済産業省 片瀬局長より説明>

○原山議員 ありがとうございます。

ここから質疑応答ということで、コメントご質問ございましたらよろしくお願いします。小谷さん。

○小谷議員 最初のページの基盤戦略技術のところですが、ここにデータ科学のような言葉が全くないです。今恐らく非常に大切なことは大量にあふれるデータから意味のあるものを取り出す技術だと思います。そのようなデータ解析を含む数理・情報科学技術は間違いなく基盤戦略技術だと思いますので、そのような文言を加えていただければと思います。

○片瀬局長 おっしゃるとおりで、A I と書かせていただいたのはそのつもりだったのですが。

○小谷議員 A I とは全然違いますので。数理・情報科学技術とかデータサイエンスとかいう表現が適切です。

○橋本議員 どうもありがとうございます。私自身は先ほどご紹介あったようにここの小委員会での検討に関わっていますが、今日ご説明いただいて、我々がここで議論しているのと方向性が一致しているものだということを改めて感じていただけたのではないかなと思います。ある意味でみんなのベクトルがそろっているので、ぜひいいものをつくっていききたいなと思っています。

それで、ポイントを少しだけ申し上げます。最初の研究開発のところ、第4期に特に「課題達成型」に大きく転換したことに加え、それだけではなく、ボトムアップ型というか「基礎戦略型」の重要性というのを新たに明確にして、これらを両輪とした研究開発を推進することをあげています。どういう展開があるかわからないというのが科学技術ですので、そういう研究開発についてもしっかりとサポートしていくべきだということを強調していただいているのかなというふうに思います。

二つめは、これもある意味で画期的だと思うのですけれども、経産省のレポートにこの「基礎研究力の強化」というのが大きく打ち出されているということがあります。それだけ基礎研究力をしっかりと強化することが求められており、政策的にふるということとあわせて大学と

かにその部分の意識を植え付けるという意味だと思います。これも一つ特出し的に申し上げることなのかなというふうに思います。

それから三つめですけれども、やはり産業界のコミットメントというのが第5期は大変重要だと思うのです。例えば具体的には2ページ目にあるような人材の質的・量的ミスマッチが今言われているわけですし、事実そうなのですね。これはでも、それではとって産業界に合わせていったとき、ニーズをポツと変えられたら大学というのは非常に困るのですね。人材のところはやはり長期的なものなので、これは産業界としっかりとスクラムを組んでやるべきだと思います。そういう意味で、私がずっとしつこく言っている産業界のコミットメントを第5期は一步全面的に出していただきたいと思うのです。その典型が人材育成のところにあります。

さらに橋渡し機能の強化のところでは申し上げると、先ほど内山田議員も言われましたけれども、やはり国研を軸とした橋渡し機能強化が明確に出ているので、それとあわせて地域イノベーションにおける連携というのも今度の大きな柱の一つにするべきだと思うのです。これは大体我々の議論と一致していますけれども、こちらのほうではより明確に出ているので、ぜひ今後の第5期を策定するに当たっては取り入れる形で議論していただければというふうに思います。

以上です。

○久間議員 私は産業界出身ですけれども、今までは開発法人や大学等でやっていることと産業界が必要とする分野とのミスマッチが非常に大きな問題でした。そこで第5期科学技術基本計画では、将来の我が国の成長や雇用を支える産業のありようを課題にしていくということです。そのためには産業界が、こういう分野の人材が必要ですよということを具体的に大学側に言わなければいけないですし、そしてそういう人が育成されたら、産業界は雇用していくというコミットメントが、必要だと思います。

それから、開発法人の橋渡し機能ですが、もちろん大学から直接産業界に、というケースがあってもいいのですけれども、重要なことは開発法人に、産業界が必要とする技術の拠点を作ることです。魅力のある拠点をつくることを心掛けないと産業界はついてこない。そのような拠点ができれば、産業界から優秀な人材と研究資金を出すという仕組みをつくりたいです。魅力ある拠点づくりが重要なキーワードですので、よろしくをお願いします。

○大西議員 内容については、これはもう既にまとまったもので我々がつくっているわけではないので承るということだと思うのですけれども。私が特に関心を持ったのは4ページの橋渡し

し研究機関、ここ自体にももう少し地域という用語などが出てきているといいのかなと。

(4) で書いてはあるのですが、橋渡し研究機関と大学との連携というのが全国各地で行われるようなことが必要だと。

それで、そのつくり方がちょっと気になっていて、先ほど事務局が中心となって委員の人に個別に意見を聞いてまとめたという、いかにも短期間で経産省事務局主導型でまとめたような印象を受けたのですが、委員も東京の大学の先生と、中小企業の方が入っているのかどうかわかりませんが、少し片寄っているのではないかと。やはり全国の意見をきちんと聞いてこういうレポートをまとめるようにしないと推進力が全国的に出てこないというふうに思うので、こういう議論の仕方についても工夫していただくといいのかなと思います。

以上です。

○片瀬局長 ありがとうございます。まず、大西先生のおっしゃった点についてですが、昨年の1月から6カ月間集中的にイノベーション・システム全体の議論をし、その流れの中で相当こうした議論が出てきたということでございます。それを改めて事務局でまとめてご意見をお伺いして、さらにもう一度委員会でご議論いただいたということでございます。

それから、委員の偏りのご指摘がありましたけれども、資料の参考1をご覧くださいればわかるように、例えばこの福田金属箔粉工業株式会社は中堅・中小企業でございますし、できるだけバランスに配慮しているつもりです。バランスにつきましては、引き続き配慮しながら進めていきたいと思っております。

それから、橋本先生がおっしゃった産業界のコミットメントについては、私どももそのとおりだと思っております。ただ、具体的にどう実現するかという点において、最終的に判断するのは個々の企業ですので、企業にとっての合理的な経営とコミットメントをうまく融合させる制度設計とすべく、よく議論していかなければならないと思っております。そういう意味でも、この理工系人材産学官円卓会議に各産業界の代表の方に入っていただく予定にしております、よく議論して実際に機能する形での産業界のコミットメントをいただくようなやり方というのを考えたいと思っております。

○内山田議員 産業界のコミットメントというお話が、橋本先生も強く発言されたのですが、産業界がコミットメントするというのは現状では無理だと思っております。産業界はリスクを負いながら自己責任で事業をやっています。けれども、今ここで議論していることは、税金の中でどういうふうにやろうかという議論をしているのではないのでしょうか。産業界と大学の関係

が確かに今うまく機能していない、諸外国と比較しても日本は産学連携がまだまだ不十分というのはそのとおりだと思います。これは産業界の要望が、今の日本の産学連携の仕組みにしっかりと織り込まれていないということが要因だと思います。産業界が今やるべきことは、ちゃんと産学連携を有効に働かすためにはこういうふうにやってくださいという要望をしつかりと言うという役割責任であって、それをやってくれたら日本の科学技術研究費の何%を産業界が負担するとかそういうコミットメントはあり得ないと思っています。

○橋本議員　そこまでは言ってないです。

○久間議員　数字を含めたコミットメントではなく、産業界が望む研究開発拠点ができて、産業界が望むテーマの研究をやりますといったときに、産業界からも参加してくださいということとです。

○中西議員　結局いつも課題になるのは、ゴールが同じにならないとそうならないことですよね。最初から出発点だけ議論になっていて、どっちに向かおうというゴールの共有をどうやってやるかと。

○久間議員　もちろん、研究開発のベクトルを合わせるものが条件です。研究法人や大学側と産業界が、お互いにゴールを合意したときです。

○内山田議員　やはり産業界の一番の問題は、今までの産学連携の中で、そういう方向性の話や要望について、国や大学に対してしっかりと伝えてないということ、結果的に個別企業のニーズぐらいで産学連携をやっているのが、やはりいけないというふうに思っています。

○橋本議員　そう。そこですよ。

○片瀬局長　コミットメントは多義的な言葉だと思うのですが、要するに大学が一定の方向に動いたときに産業界がそれを受け止めていくといった一定の信頼関係を築くことは必要だと思います。それから、個々の例を挙げますと、ある企業からお伺いした話では、ある大学との間で10程度の寄附講座をつくり、学生に来てもらうという形で企業と大学との連携を進めているとのこととです。こうした方法は、ミクロのコミットメントのやり方だと思います。

私は内山田会長がおっしゃっていることは全くおっしゃるとおりだと思います。やはり産業界というのは非常に合理的に行動しますし、株主との関係もあります。ただ、もう少し両方が意思の疎通をし合って信頼関係でもって進めていくような形があるのではないかという問題意識を持っております。

○原山議員　多分言葉の使い方だと思うのですが、コミットメントというのは一方的に

するわけではなくて、この場で議論しなければいけないのはエンゲージメントだと思うのですね。企業サイドも自分の意思を表明すると同時に、それを額面どおり大学が受け取るのではなくて、すり合わせの作業があつてこそ何か一緒にできるという。これまで既にやってないわけではなくて、個別の企業、個別の研究者、いろいろなレイヤーでいろいろなことが起こっていることは確かなのですけれども、それを個別からもうちょっと大きな話にもっていきたいというのが多分ここでの議論になると思います。それは単純に交付金が少なくなったから産業界からお金をもらおうというそんな単純な話では全くない、大学の人は思いません。

肝心なのは、自分の大学の自分のメリットになることは何かというのを探さなければいけないのであって、それはそのメリットを念頭に置いたうえで協働できるものがあればやっていくと。一番コアの部分というのは人材であつて、産業界にもウィンウィンになるわけですよ。それはやはり先ほど橋本さんがおっしゃったように、やはり一緒に育てるというスタンスでもって大学に入り込んでいただく。それは必ずしもバイアスをかけて産業寄りの人だけが育つわけではなくて、産業界の考えていること、要求することというものをすり合わせすることを知った上で学生が育つ、そういうやり方というのをやはりほかの国でやっているところもあるので、日本でもやっていきたい、その制度設計がどういうふうにするかがみそであつて、そういう細かところまで詰めないとバイアスがかかってしまうし、思った方向に行かないというのがこれまでの体験です。

小谷さん。

○小谷議員 同じ意見でして、大学の一番大きな貢献は人材育成です。日本の国民の50%は大学を通過して社会に出ますので、社会のニーズに合った人材育成をしたいと思っています。

大学の教員にとっての一番大きなジレンマというのは、学生の教育は6年から10年かかるわけですが、どのような人材を育てれば10年後の産業界のニーズに応えられるのかという情報がいつも間接的にしか入ってこないことです。意欲のある学生が産業界・社会が求めている人材に育つよう、できれば産学で一緒に考えながら育成していきたいと強く願っています。

研究者になる学生は本当に一部ですので、社会で活躍する人材を育てることが大学の教員の一番強い意欲でもあり情熱です。

○久間議員 大学の先生がみな原山議員や小谷議員や橋本議員のような考え方だといいいのですが、現実には多分まだ一部の先生方だけです。産業界がニーズを伝え、大学側がそれを理解して人材を育成するという仕組みをどうやって構築し広めるかということが重要なのです。

○小谷議員 社会に役に立つ人材を育てたいと思ってるのです。

○久間議員 みなさん小谷議員のような先生だったらいいのですが、そうではない人もいますから困ります。

○原山議員 いや、産業界も同じであって、中西さん、内山田さん、久間さんみたいな方がすべてではないということが現実であって、それも知った上でどういうふうなゲームをしていくかということを考えなければいけないと思っています。

すみません、結構熱がこもってしまい。

そろそろ時間になりましたので、本日は片瀬さん、どうもありがとうございました。今後とも引き続き情報交換させていただければと思います。ありがとうございました。

これをもちまして、本日の有識者の会議を終了させていただきます。

ありがとうございました。

以上